

高梁の 近代化遺産 ①6

旧芳賀芙蓉軒

17世紀オランダの画家ヨハネス・フェルメールは、詩情あふれる人物描写とマチユエル（絵肌）にこだわった風景描写で人々を魅了します。それは、フェルメールが単に、目の前の対象を模写したのではなく、光が「あの瞬間」にもたらす複雑な変化を正確に描写したからであるといわれています。



芳賀芙蓉軒の全景。天井の高い二階がスタジオ。北側の窓と屋根から光を取り込みます。明治・大正・昭和の面構えが数多く、ここで映像になりました。

フェルメールがカメラ・オブスキュラを利したことは広く知られています。カメラ・オブスキュラとは、小さな穴から巨大

な暗箱に投影された光景を描く手段。16世紀から画家の間に普及し、ルネサンス以降のレアリズムに大きな影響を与えました。

フェルメールが描く人物は、窓からの柔らかい光の中にいます。ところが、人物にピントの合っていない作品があります。ポトリイト写真の鉄則は、カメラに近い目にピントを合わせることで、世界中で愛される画家の肖像画がピンボケなのはなぜでしょう。

写真は、19世紀にフランスのニエプスが發明。ダゲールが実用化しました。わが国に写真が入ったのは江戸末期。長崎の蘭学者・上野俊之丞がオランダから写真機一式を購入したのが最初だとされています。鹿児島しよごの尚古集成館しよごせいけいには、島津斉彬しまづなりあきらを写した銀板写真が保管され、重要文化財に指定されています。岡山では、明治2年、池田家の家臣が京都に写真修行に派遣されています。

大工町の旧芳賀芙蓉軒は、高梁で最初に開業した写真館です。木造二階建て棧瓦葺き、壁は漆喰塗り、一部下見板張り。二階北側のスタジオは、広い窓と屋根から採光します。北側からの光は終日均等で、紡績工場などの鋸屋根ののこぎにも応用されました。フェルメールの光も北から射してははずです。

明治5年頃の岡山には、二人の写真師が開業していた記録があります。平見郡司高梁市文化財保護審議会委員のお話しによると、備中町出身の芳賀直次郎は岡山の写真館でごく短期間で写真技術を修得。現在の場所に店を

構えま
した。

直次郎
父子は、

明治、

大正、

昭和末

期まで、

肖像写

真や記

念写

真、備

中松山城や高梁周辺の風景、美術品などを記

録。宮内省の専属写真師や陸軍大演習の記録

方に登用され、財産税の鑑定役も務めたそう

です。岡山市北区川入にある犬養木堂記念館

には、360度パノラマ写真が撮れるサーカ

ットカメラを駆使した作品が飾られています。

高梁市歴史美術館には、写真館が残したガ

ラス乾板やフィルムが所蔵されています。ガ

ラス乾板には、肌の描写をやわらげるために

彩色したものが多数あり、直次郎の画質への

こだわりを伝えています。

愛知県の博物館明治村にある高田小熊写真

館は明治41年、津山の江見写真館は昭和4年

の竣工で、共に登録有形文化財の洋風建築。

準和風建築の旧芳賀芙蓉軒は、全国でも稀少

価値の高い近代化遺産です。

（文・吉備国際大学社会学部ビジネスコミュニ

ニケーション学科准教授・小西伸彦さん）



大きな切妻屋根の入口。ペンキの塗られた下見板張りの壁。芳賀芙蓉軒は、教会堂と尋常高等小学校と鼎をなすハイカラな建物であったことでしょう。

編集と発行(毎月15日発行)高梁市総務部企画課

〒716-8501 岡山県高梁市松原通2043 電話0866(21)0210 ホームページアドレス <http://www.city.takahashi.okayama.jp/>



環境にやさしい大豆油インキを使用しています。

本紙は環境保全のため再生紙を使用しています。

